地質ニュース506号，60-62頁，1996年10月
Chishitsu News no.506, p.60-62, October, 1996

ユニークな
地質系博物館
(16)

日本一の砂白金塊がある 弥永北海道博物館

中川　充[1)]

1. はじめに

まずお断りしておくが，今回紹介する博物館が「ユニーク」ではあるが「地質系」に相当するかどうかは，来訪者の興味関心次第である．それは，この私設博物館が，展示品の多くを所蔵する北海道貨幣史研究会の創立15周年記念に開設され，当時の名前が「彌永北海道歴史館」であったことから伺えよう．この研究会は館長彌永芳子女史（写真1）が主宰しており，彼女の飽くなき好奇心と，それを満たそうとする探求心と，足で稼いだ努力の結晶が，数冊の本として上梓され（注1），また，この博物館として結実しているのである．

自宅を改造した3階建ての瀟洒（しょうしゃ）な建物（写真2）の中には，1階に鉱石や化石や琥珀，2階に貨幣・紙幣類と江戸時代の両替商店舗の復元．そして，3階には砂金堀の道具類が展示されている．一見関連性の無いように思えるこれらのものは，女史の中では一本の確固たる線でつながっている．すなわち，初めての欧州旅行から持ち帰った貨幣に興味を抱き，学際的で未開拓な領域である北海道の貨幣史についてまとめようとするうちに，砂金および北海道ならではの砂白金採掘に行き当たり，現地調査や聞き取りをしているうちに集まった品々ということになろうか．

最近は，女史のこうした生き様に焦点を当てた紹介記事が各種PR誌や新聞などに掲載されており（注2），彼女自身講演会などに招かれたりして忙しい日々を過ごされているとのこと．活動は道内に留まらず，日本砂金協会会長として1994年にはフィンランドに，と毎年のように海外へ出かけるという活発さである．このように，彼女の歩んだ歴史抜きにしてこの博物館を語る訳にはいかないのだが，ここでは「地質系」博物館としての側面を強調した紹介を行おう．

写真1　館長彌永芳子女史の肖像

写真2　博物館外観

1) 地質調査所 北海道支所

キーワード：北海道，私設博物館，砂金，砂白金，貨幣史

2. 北海道の砂金と砂白金

古来人心を惑わせてきた貴金属は，各地でゴールドラッシュを引き起こした．開拓の遅れた北海道では，松前藩の時代にキリシタンの悲話を伴う道南地域の砂金堀が端緒となり，明治時代には道北枝幸山地周辺が東洋のクロンダイクと呼ばれるほど賑わったという．その後，道内各地に展開していった砂金堀は，同じ手段で採取できる砂白金も回収するようになった．

山師の夢は一攫千金．実際金塊を掘り出すもよし，砂金が採れる場所の情報を教えることによって稼ぐもよし．語りもあれば騙しもある世界である．従って，砂金や砂白金の産地や採取量の正確な情報を入手することは，採掘当時でも困難であったろう．幸い北海道では，砂白金をほぼ一手に取り扱っていた名寄の島田商店に記録が残されていた．創業者島田千代松氏は，自ら「イリジウム王」と名乗り，注意深く事業展開に尽力された．二代目を継いだ息子の要一氏は研究熱心で，科学的にも貴重な資料を蓄積され，必要に応じて公表に協力されてきた（舟橋，1953）．そして，これらをほとんどそのまま引き継いだのが彌永女史である．

砂金を展示してある博物館は多いが，砂白金となると数がグッと少ない．それもそのはずで，本邦で砂白金が稼行された実績があるのは北海道に限られているからである．ここには，記録上（鈴木，1950）日本最大（重さ9.4g）の砂白金ナゲット（写真3）が収蔵されている．それだけでなく，道内60ヵ所にのぼる産地の正確にわかる砂白金がその地図と共に保管されている．これらすべては女史自身が多くの砂金堀の方々から話を聞き，実際に足を運ばれて現場を確認しながら採取されたもので，地道な努力の賜物である．

3. 旧称イリドスミン

北海道に産する砂白金にプラチナを含むものはごく僅かである．しかし，白金族元素はプラチナだけではない．6種類ある同じ白金族元素のうちのイリジウム，オスミウム，ルテニウムからなる合金も立派な白金族鉱物で，長くイリドスミンと呼ばれてきた．北海道の砂白金のほとんどは，このイリドスミンである．高温に耐え，酸やアルカリに強いだけでなく，相当な硬度を持っているために万年筆のペン先として需要が開けた．

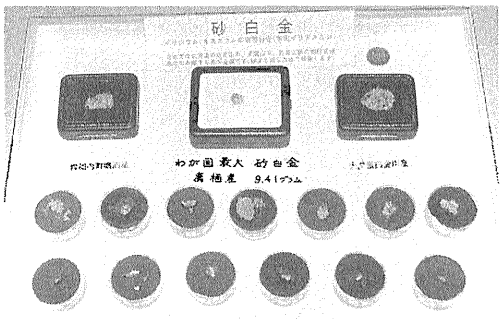

写真3　整理された砂白金標本と本邦最大の砂白金ナゲット（奥中央）

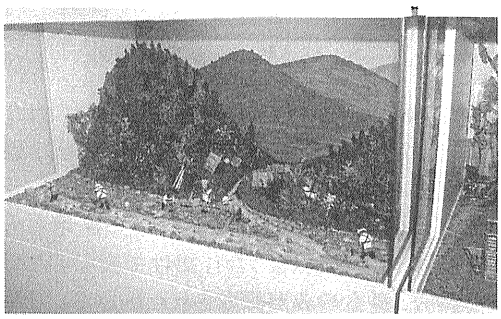

写真4　砂白金堀の光景を表すジオラマ

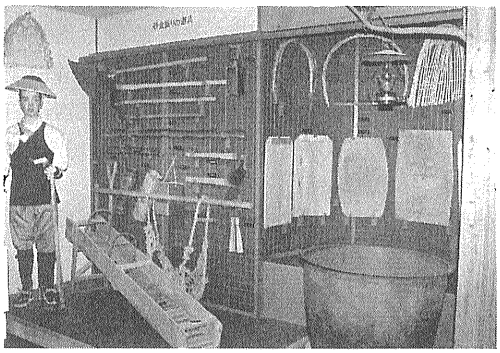

写真5　砂白金堀道具類

金や白金を含む貴金属鉱物の比重は普通の岩石の5～6倍あるので，それが砂粒になったとしてもそう簡単には川の流れで遠くまで運ばれない．川底の岩盤の割れ目や粘土層など，これ以上は下に沈めないような所に落ち着く性質がある．逆にいえば，砂金や砂白金はこうしたところにポツリポツリと潜んでいるのである．従ってこれらを採掘するためには

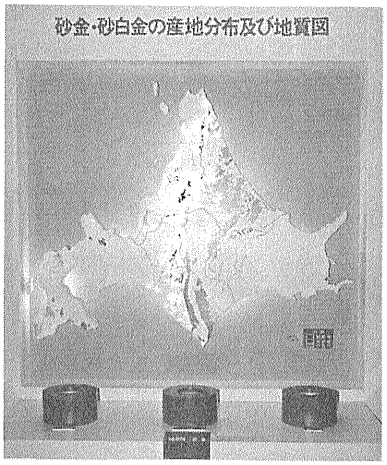

写真6　砂金砂白金産地分布図

川底まで掘らなければ始まらない．博物館にはこれらの様子が写真やジオラマ(写真4)で示され，道具なども展示されている(写真5)．

また，北海道の砂金および砂白金の産地も大きな地図にランプが点くような仕掛けで展示されている(写真6)．砂金のみが採取された地点は，道北の枝幸山地，北見周辺地域，道南の今金や松前地域などに散在している．これに対し，砂金と共に砂白金が採取された地点は，明らかに神居古潭(かむいこたん)帯の蛇紋岩に沿った分布をしているのがわかる．砂白金の起源が蛇紋岩であることは常識だが，蛇紋岩に白金族鉱物が含まれている例(Nakagawa et al., 1991)はまだ1つしかない．

なお，イリドスミンの現在推奨される鉱物学的名称や，その産出の地球科学的意味合いについては，先にまとめたので(中川，1994)それを参照願いたい．

4. おわりに

個人の博物館であるが故に悩みも多い．たとえ発端が趣味的であろうと，収集に要した苦労を思えば手元に置いておきたいと思うのが人情である．しかし，女史自身「私はコレクターではない」と公言してはばからない．だから値踏みして売却を交渉する方々とは一線を画しているという．

それでも，いかに健康で活動的な女史とはいえ限りある人間である．貴重な資料の散逸は忍び寄る恐怖なのである．これまでにも既に2回スミソニアン博物館から資料の寄贈要請があったという．しかし，女史は「日本のものは日本に，北海道のものは北海道に」という精神でお断りしたそうである．歴史的な研究をされたが故の正しい文化財観であると畏敬の念を禁じ得ない．

また女史は，これらが後進の教育や研究に役立つことを願っており，そのための協力は惜しまれないとのことである．ただし，収蔵品の貴重さと価値を十分理解することが大前提であり，最低限研究の成果を女史に報告する義務はあろう．長年培ってきた女史の鑑定眼は，関わった分野が分野だけに，金や名誉に眩んだ人間をも見抜くはずである．

博物館は札幌市営地下鉄南北線の「北18条」駅下車の後，徒歩で北へ1分西へ1分の所にある．通常午前9時30分から午後5時まで開館で月曜日が休館日．入館料は大人500円，中高生300円，子ども200円．

住所：〒001　札幌市北区北19条西4丁目
電話：011-716-1358

小さいながら，まばゆい輝きとその陰にある歴史の重さが感じられる博物館である．

注1)　「箱館通宝鋳造の顛末」(1977)北海道貨幣史研究会，「蝦夷地の中の日本」(1979)，「えぞ地の砂金」(1981)北海道出版企画センター，「北海道の砂金と砂白金」(1984)みやま書房，「北海道開拓と本願寺道路」(1994)弥永北海道博物館など．

注2)　北海道中央バス発行「フリーウェイ」6号(1993)，北海道新聞発行「おんとな」1月14日(1994)，日航商事札幌支店発行「ノーザン・ヴォイス」11巻(1996)，北海道銀行発行「ういんぐ」13号(1996)，など．

文　献

舟橋三男(1953)：5万分の1地質図幅「上江丹別」および説明書．北海道開発庁，p. 53.

中川　充(1994)：砂白金の宝庫ー北海道はイリジウムの時代．地質ニュース，no.480, 23-26.

Nakagawa, M., Ohta, E. and Kurosawa, K. (1991) : Platinum-group Minerals from the Mukawa serpentinite, southern Kamuikotan belt, Japan. Mining Geol., 41, 329-335.

鈴木　醇(1950)：北海道の砂白金鉱床．北海道地質要報，no. 14, 1-41.

NAKAGAWA Mitsuru (1996) : Geological museums in Japan16, "Yanaga Museum of Hokkaido History".

＜受付：1996年6月25日＞